

雄治はゆっくりと頷いた。

「女の人からの相談だ。この手の問題は一番苦手だ。」

色恋沙汰だな、と解した。雄治は見合い結婚だが、お互い婚礼の日まで相手のことをよく知らなかったという話だ。そんな時代を過ごしてきた人間に恋愛問題を相談する方が非常識だと貴之は思う。

「適当に書いとけよ」

「何言ってるんだ。そんなわけにいくか」雄治は少し怒った声を出した。

貴之は肩をすくめ、腰を上げた。「ビール、あるんだろ。貰うぜ」

雄治の返事はないが、冷蔵庫を開けた。2ドアタイプの旧式で、二年前に姉の家が買い替えた時、それまで使っていたものを貰ったのだ。この前に使っていたのは1ドアだった。昭和三十五年に買った代物だ。貴之は大学生だった。

ビールの中瓶が二本冷えていた。酒好きの雄治は冷蔵庫からビールを絶やすことがない。昔は甘いものになど見向きもしなかった。木村屋のあんぱんが大好物になったのは、六十歳を過ぎてからだ。

まずはビール瓶を一本取り出し、栓を抜いた。さらに食器棚から勝手にコップを二つ出し、卓袱台に戻った。

「親父も飲むだろ」

「いや、今はいらん」